

マルコによる福音書 13 章 14 節～27 節

2018 年 5 月 24 日

古本 靖久

1、聖歌 56 番 「イエスキミ来たりて 天のやすきを」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 89 ページ）

4、テキストの位置

マルコによる福音書 13 章はしばしば、「小黙示録」と呼ばれます。それは書かれている内容が、「世の終わり」について言及しているからです。

終末を強調している教派や教団は、この箇所を拡大理解

して恐怖をあおることもあります。しかしイエス様が伝えたかったことは、果たしてどういふことなのでしょう。

エルサレムにて	火曜日	13:1-8	神殿の崩壊と終末
		13:9-13	弾圧のとき
		13:14-27	終わりの日のこと①
	13:28-37	終わりの日のこと②	
水曜日	14:1-2	イエス殺害計画	
	14:3-9	埋葬準備	
	14:10-11	ユダの思い	

5、節ごとに

◆終わりの日のこと①

13:14 「(荒廃をもたらす)憎む(忌む)べき破壊者(もの)が立ってはならない所に立つのを見たら——読者は悟れ(理解しろ)——、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。

「荒廃をもたらす忌むべきものが立ってはならない所に立つ」という意味不明な記述があったその後に、「読者は理解せよ」と書かれています。現代の日本に生きるわたしたちには、理解は難しいと思います。しかし当時のユダヤ人にとっては、「ああ、あの出来事か」と誰もが思い出すことができました。

紀元前 168 年に、その事件は起こりました。当時ユダヤはアンティオケアに支配されており、その王アンティオコス 4 世 (通称エピファネス) はユダヤ教を禁止します。さらに彼は、エルサレム神殿にオリンピアのゼウス像を立てさせます。この出来事はユダヤ人にとって、耐えがたい屈辱でした。

その後ユダヤ人はこの像のことを、「荒廃をもたらす忌むべきもの」と呼ぶようになります。ちなみにこの「忌むべきもの」は直訳では「吐き気をもよおすようなもの」ですから、その嫌悪感は相当なものだったようです。

旧約聖書や旧約聖書続編にも何度か、その像に関する記述がみられます。

- ・彼は一週の間、多くの者と同盟を固め 半週でいけにえと献げ物を廃止する。憎むべきものの翼の上に荒廃をもたらすものが座す。そしてついに、定められた破滅が荒廃の上に注がれる。(ダニエル書 9 章 27 節)
- ・彼は軍隊を派遣して、砦すなわち聖所を汚し、日ごとの供え物を廃止し、憎むべき荒廃をもたらすものを立てる。(ダニエル書 11 章 31 節)
- ・日ごとの供え物が廃止され、憎むべき荒廃をもたらすものが立てられてから、千二百九十日が定められている。(ダニエル書 12 章 11 節)
- ・第百四十五年、キスレウの月の十五日には、王は祭壇の上に「憎むべき破壊者」を建てた。人々は周囲のユダの町々に異教の祭壇を築き、(マカバイ記一 1 章 54 節)
- ・王がエルサレムの祭壇にお建てになった『憎むべきもの』を引きずり下ろし、聖所を以前のように高い塀で囲み、王の町であったベツルも同様に固めました。(マカバイ記一 6 章 7 節)

人々の心には、この出来事がトラウマのように残っていたのでしょう。だから「読者は理解せよ」と言われたときに、すぐに「あのような出来事のことか」と分かったのです。そしてそのような出来事が、これからも起きるとイエス様は言われます。

現に紀元 40 年前後には、ローマ皇帝のカリグラが自分の像をエルサレム神殿に立てようとしていました。イエス様の十字架は紀元 30 年頃、マルコ福音書が書かれたのは 65~70 年頃と考えられていますから、読者はすぐに「理解した」のではないのでしょうか。

13:15 屋上 (屋根の上) にいる者は下に降りて (中に入り、) はならない。(自分の) 家にある物を (から) 何か取り出そうとして中に入ってはならない。

ユダヤの住居の屋根は平たく、壁には外階段がついていました。中風の人を屋根から降ろしてイエス様にいやしてもらおうという記事がありますが、このような構造だからこそできることです。

13:16 畑にいる者は、(自分の衣) 土着を取り(るため)に帰って(振り向いて)はならない。

これらの警告は、緊急性を帯びたものです。家の中に入ることも許されず、外で寝るときには防寒のために必要不可欠な衣さえも持っていく余裕がありません。さらに「振り向くな」と命じられます。

創世記 19 章 26 節には、ソドムとゴモラが滅ぼされるときに神さまの命令に背いて振り向いてしまったロトの妻の物語が描かれています。彼女は振り向いたために、塩の柱になってしまいます。ここでも同じように、振り向かず山に逃げるようにとされます。

13:17-18 それらの日(々)には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。このこと(それが冬に起こらないように、祈りなさい。

冬には野原で食料を得ることができません。またこのようなときに、最も被害を受けるのは社会的弱者です。

13:19 それらの日(々)には、神が天地を造られた創造の初めから今まで(起こったことが)なく、今後も決して(起こることの)ないほどの苦難が来る(生じる)からである。

ダニエル書 12 章 1 節にはこうあります。

その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く 国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう お前の民、あの書に記された人々は。

終末のときの苦難は、わたしたちの想像をはるかに超えたものであるようです。

13:20 (そしてもし)主がその期間(日々)を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、主は御自分のものとして(ために)選んだ人たちのために、その期間(日々)を縮めてくださったのである。

しかし主のみ心は、だれも救われないということではありませんでした。主は彼が選んだ人が救われるために、苦難の日を縮めます。それがどれほどのものなのか、誰にもわかりません。それでは主が選んだ人とは、一体誰なのでしょうか。

13:21 (そして) そのとき、(もしもあなたたちに) 『見よ、ここにメシア(キリスト)がいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。

ここでメシアと訳されている語ですが、「クリストス」、つまり「キリスト」というギリシア語が用いられています。キリストとは人の名前ではなく、称号です。「油注がれた者」、「救い主」という意味です。

これまでも「わたしが救い主だ」と言った人は大勢いました。今もいます。苦難のときにどんなに辛くても、そのような「偽物」を信じてはならないのです。

13:22 (というの) 偽メシア(キリスト)や偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。

なぜならそれらの人たちは、選ばれた人を惑わすために来るからです。しるしや不思議な業といった目に見えるものに目を注ぐのではなく、神さまがきっと手を差し伸べてくださるという、目に見えない約束を信じることが大切なのではないのでしょうか。

13:23 だから、あなたがたは(自身で) 気をつけていなさい。(わたしは) 一切の事を前もって言うておく。」

マルコによる福音書 13 章には、ここを含めて三回「気をつけて」という言葉が出てきます(9 節、23 節、33 節)。イエス様が十字架の前に弟子たちに伝えたかった一番のこと、それは「気をつけていなさい」ということです。

イエス様を信じ、従うことには、苦難を伴います。特にこの福音書が書かれた時代、キリスト者は迫害を受けていました。だからこそ、人々には希望が必要でした。しかしここでは、たとえ選ばれた者であったとしても、惑わされないように「自分自身で」気をつけていなさいと言われていています。とても厳しい警告のように感じられます。

<前半の箇所から>

終わりのときはいつなのでしょう。ダニエル書やヨハネ黙示録といった黙示文学に神さまの計画が隠されていると思い、多くの人はその謎に迫ろうとしてきました。しかし今日の箇所からもわかるように、「その日」は突然、何の前触れもなくやってくるのです。だから油断せず、福音を伝えることに忠実でいなければならないのです。

13:24 「それらの日（々）には、このような苦難の後、太陽は暗くなり、月は光を放たず

さて、いよいよ「それらの日々」にどんなことが起こるのかという説明です。マルコ福音書にそれらの日々、つまり終末のことが書いてあるのはここが最初です。

太陽も月も光を失うという表現は、ユダヤ教の黙示文学の中や旧約聖書にもみられます。

・天のもろもろの星とその星座は光を放たず 太陽は昇っても闇に閉ざされ 月も光を輝かさな。 (イザヤ書 13 章 10 節)

・お前が消えうせるとき わたしは空を覆い、星を暗くする。また、太陽を雲で覆い、月も光を放たない。 (エゼキエル書 32 章 7 節)

終末のときには、この世の苦難や悲劇とは違い、宇宙そのものが消滅するというのです。

13:25 星は空から落ち（てくる）、（そして）天体（にある諸力）は揺り動かされる。

この当時の人々は、太陽と月以外の光を発する天体（主に星）の多くは、悪魔的勢力が力を発しているのだと考えていました。それをここでは「天にある諸力」と呼んでいます。終末には神さまに敵対するそれらの勢力が、揺さぶられて消滅します。

これらの出来事は、預言者も言及しています。

・その前に、地はおののき、天は震える。太陽も月も暗くなり、星も光を失う。(ヨエル書 2 章 10 節)

13:26 （そして）そのとき、人の子が（雲の中で）大いなる（あらゆる）力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る（だろう）。

25 節までで終わったら、ただの滅びの預言です。しかしここで「人の子」の登場です。この箇所は、ダニエル書 7 章 13 節に由来しています。

・夜の幻をなお見ていると、見よ、「人の子」のような者が天の雲に乗り 「日の老いたる者」の前に来て、そのもとに進み 権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え 彼の支配はとこしえに続き その統治は滅びることがない。

雲は神さまの住まいだと考えられていました。また「日の老いたる者」は神さまのことです。したがってダニエル書では、「人の子」は神さまの王座に昇っています。しかしここでは、「人の子」は人々の間にやってくるのだとイエス様は言われます。

13:27 (そして) そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果て(端)から天の果て(端に至る)まで、彼によって(その)選ばれた人たちを四方から呼び集める(だろう)。」

当時の人々は「人の子」と「イエス様」を同一視していたと思われま。では何のために「人の子」はやってくるのでしょうか。それは天使たちを遣わして、呼び集めるためです。「地の端から端まで」や「天の端から端まで」という言い方は、ユダヤ教の中でもよくつかわれる言い方です。しかしマルコ福音書には「地の端から天の端まで」と書いてあります。

ここでイエス様が強調したかったのは、呼び集められるのは、地上だけでなく天のあらゆる場所も含むすべてのところということです。今地上で生きている人たちだけでなく、すでに天に召された人たちの中にも、選ばれた人たちがいるのです。

では選ばれた人たちとは一体誰なのでしょう。簡単にいうと、「神さまが救おうとして手を差し伸べた人たち」のことなのではないでしょうか。そこにわたしたちは、入れられているのでしょうか。

<今日の箇所から>

「世の終わり」と聞くと、「悪い奴らが懲らしめられる」場面を想像してしまうのは、よくないことだと思います。しかし迫害を受けていた当時の人々にとっては、「あのローマの人たちは、どんな裁きを受けるのだろうか」と考えていたのかもしれない。しかしこの箇所でイエス様は、人の子がやってくる本当の目的は、「滅ぼす」ことではなく「選ぶ」ことにあると言っているようです。そのためにわたしたちは、「気をつけて」備えるのです。

マルコによる福音書 13 章は、読んでいてとても暗くなる箇所です。しかしここでイエス様は、たとえ今迫害されていたとしても、苦難の中に立たされていたとしても、耐え忍びなさい。なぜならあなたがたは、呼び集められるからだと言っておられるのです。

今回の箇所が言わんとしていること、それはこのようなことではないでしょうか。

「あなたがたも覚えているだろう。あの忌まわしい日のことを。終わりの日の出来事はそんなものではない。しかし恐れるな。わたしは天使を遣わして、あなたたちを集める」。

「御国が来ますように」、イエス様に呼び集められるその日を待ち望みながら、祈り続けていきたいと思ひます。

今回の学びはこれで終わります。次回は 6 月 28 日(木)10 時半からです。「終わりの日のこと②」(マルコ 13 : 28~37) について学んでいきます。